



Title	よみがえる重建懷徳堂：元模型の制作について
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懷徳堂センター報. 2006, 2006, p. 5-14
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24403
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

よみがえる重建懷徳堂——復元模型の制作について

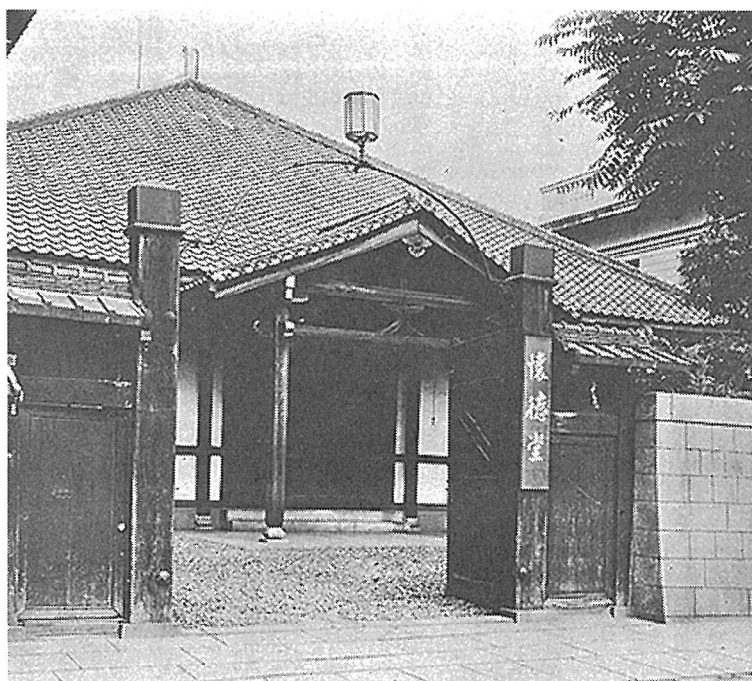
湯 浅 邦 弘

懷徳堂と重建懷徳堂

江戸時代の大坂学問所「懷徳堂」は、江戸幕府の崩壊とともに明治二年（一八六九）に閉校した。懷徳堂百四十年余の歴史が途絶えたのである。

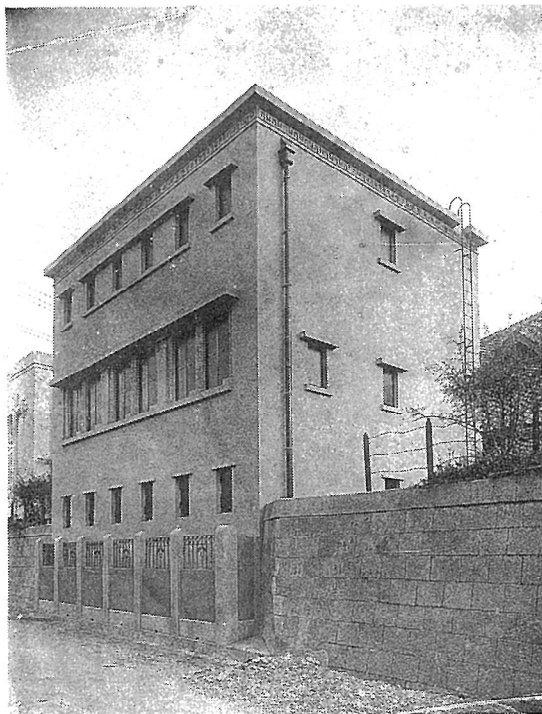
ところが、それから約四十年の後、懷徳堂の復興を期待する声が歴史を大きく動かしていった。明治四十三年（一九一〇）、大阪の政財言論界を挙げて懷徳堂記念会が設立され、その翌年には、懷徳堂貴重書の復刻刊行、歴代教授を祭祀する師儒公祭の挙行、貴重資料の展覧会の開催などの顕彰事業が相次いで行われた。

さらに大正五年（一九一六）には待望の学舎が建設された。場所は江戸時代の懷徳堂があった所から南東に約1kmの地に移動したため、その学舎は単なる改築ではなく、新たな場所に「重建」された懷徳堂、すなわち「重建懷徳堂」と呼ばれることとなった。重建懷徳堂は安価な学費で講義を公開し、大阪の市民大学・文科大学として大きな役割を果たした。大正十五年（一九二六）には、鉄筋コンクリート造り三階建ての書庫・研究室棟も増設された。



【重建懷徳堂玄関】

【重建懷徳堂書庫・研究室棟】



重建懷徳堂設計図の発見

昭和二十年（一九四五）の大阪大空襲により、重建懷徳堂は書庫・研究室棟を残して焼失した。拠点を失った懷徳堂記念会は、昭和二十四年、大阪大学に文学部ができたのを機に、三万六千点に及ぶ貴重資料を大阪大学に寄贈した。阪大では、その貴重資料を「懷徳堂文庫」と命名して保存し、以後、懷徳堂記念会と阪大とが協同して、資料調査、公開講座などの各種事業を継続することとなった。

平成十二年（二〇〇〇）、懷徳堂研究会（事務局：大阪大学中国哲学研

究室）による懷徳堂文庫資料の総合調査が始まった。この研究会は、その翌年の大阪大学創立七十周年記念事業に向けて組織化されたもので、記念事業の一環として公開された懷徳堂貴重資料のデータベースの作成に貢献した。また、この研究会メンバーが中心となって、同じく平成十三年の大阪大学附属図書館新館設立に伴う懷徳堂文庫移転作業を進め、資料の整理・調査を行った。

この一連の作業の中で、懷徳堂文庫の中に、重建懷徳堂の設計図面（青焼き）が残っていることが確認された。主な図面は全五枚からなり、表紙に「大正四年九月 懷徳堂設計図 竹中工務店」とあった。

復元模型制作への道

平成十六年（二〇〇四）十二月、懷徳堂記念会運営幹事会において、懷徳堂記念会創立百周年記念事業が初めて話題となった。懷徳堂記念会の設立は明治四十三年（一九一〇）。その百周年に当たる平成二十二年（二〇一〇）に向けて、どのような記念事業を行っていくのがが議されたのである。その席上、筆者は、右の重建懷徳堂設計図のことを紹介し、記念事業の一環として重建懷徳堂復元模型の制作を提案した。

この提案は了承され、柏木隆雄文学研究科長より、文学研究科玄関への設置を前提としたトータルプランの作成について指示があった。

ただちに筆者は、精密模型の制作を専門にするトータルメディア開発研究所に重建懷徳堂模型制作の見積を依頼したが、二十分の一（三十分の一）の精密模型で約五百万円になるとの試算結果を得た。文学研究科の年間予算規模からは到底実現不可能な経費であった。

そこで筆者は、平成十七年一月十七日、設計図面を携えて、大正当時の

設計・施工を担当された株式会社竹中工務店を訪問し、模型制作への協力を要請した。この席で、この設計図面は当時の本物（実物）であること、この図面は現在竹中工務店には残存していないこと（すなわち大阪大学懷徳堂文庫のものが唯一の図面であること）、この図面に基づいて復元模型を制作することが可能であること、などが確認された。

なお、訪問以前、文学研究科と竹中工務店とは交渉がなく、筆者もその手がかりを探しあぐねていたが、幸いにも、平成十二年度以来、懷徳堂文庫のデジタルコンテンツ化に御協力いただいている凸版印刷株式会社の森澤和明課長より、竹中工務店秘書役の上田全良氏を御紹介いただき、右の訪問が実現したものである。当日は、凸版印刷の森澤氏、森田敬子氏にも同席いただき、上田秘書役からは、模型制作について「前向きに検討する」との回答を得ることができた。

これを承けて、二月一日、柏木研究科長と筆者が再び竹中工務店を訪問し、本城邦彦常務取締役面に面会した。ここで、文学研究科から正式に、重建懷徳堂復元模型制作について要請を行い、竹中工務店からは、模型を制作し大阪大学に寄贈していただける旨の正式回答を得た。

この決定を承けて、二月十六日、竹中工務店の設計部設計課長の野田隆史氏と模型制作を担当されることとなった三浦模型の三浦良雄氏とが来学され、懷徳堂文庫所蔵の全ての設計図面を詳細に確認された。この際、文学研究科として、平成十七年秋に受贈式典を挙行したい旨を伝え、了解を得た。野田氏からは、夏頃までに一部のサンプルを提示できるような日程で制作を進めたいとの意向が示された。

復元模型の完成

それから約五ヶ月の後の七月十一日、野田氏と三浦氏が来学され、制作途中の模型の一部サンプルを提示された。文学研究科からは柏木研究科長、江川温副研究科長、園府寺司教授および筆者が立ち会った。なお、この席で、復元模型は、五十分の一サイズのを一点、百分の一サイズのを二点寄贈いただき、五十分の一サイズのを文学研究科玄関に、百分の一サイズのを大阪大学総長室と中之島センターにそれぞれ設置し、その受贈式典を十月十一日に挙行することが決まった。

この日程に沿って最終的な制作が進められる一方、文学研究科では、受贈式典にあわせて玄関の改装と「懷徳堂と大阪大学文学研究科」と題した大型説明パネルなどの制作・設置を進め、十月一日、二学期の開始に合わせて施工が完了した。

その四日後の十月五日、野田氏と三浦氏が来学され、文学研究科玄関ならびに研究科長室において、完成した模型を披露された。制作担当の三浦氏からは、五十分の一サイズのものについては、さらに敷地内に書生数体、敷地外に人力車や材木を引く人物を設置したい旨の説明があった。建物のスケールを実感しやすいという点でも評価できる案であり、文学研究科側も了解した。

受贈式典の挙行

平成十七年十月十一日午前十二時、完成した復元模型が大阪大学文学研究科に搬入された（カラー口絵参照）。午後一時半より、関係者三十八



【柏木隆雄文学研究科長による模型披露】



【感謝状贈呈】

【マスコミ各社取材の様子】



名を招待して、大阪大学文法経中庭会議室において記念式典が挙行された。冒頭、文学研究科の柏木研究科長から、模型制作の経緯について概要の説明があり、続いて宮原秀夫大阪大学総長による式辞、竹中工務店副社長山原一晃氏による御挨拶があった。

部屋の中央奥に並べられていた模型が披露されたのはその後である。模型を覆っていた白い箱が、文学研究科の柏木研究科長、林正則教授（評議員）、向山彰事務長によって取り除かれ、出席者から感動の声が漏れた。式典の最後を飾って、宮原阪大総長より、竹中工務店の山原副社長に感謝状が贈呈された。

式典終了後、NHKテレビ、毎日新聞、読売新聞などのマスコミへの対応を筆者が行った。式典では披露しなかった重建懷徳堂の設計図面を展開し、設計図と模型との関係について説明を加え、記者からの質問に答えた。また、会場を文学研究科第一会議室に移し、懇親会が開催された。

なお、当日の出席者（懇親会のみの方も含む）は次の通りである（敬称略）。

学外

- 山原 一晃（株式会社竹中工務店取締役副社長）
- 本城 邦彦（同・常務取締役）
- 野田 隆史（同・大阪本店設計部設計課長）
- 小谷友一郎（凸版印刷株式会社第二営業本部部长）
- 竹中 照一（同・販売促進本部部长）
- 森澤 和明（同・販売促進本部企画促進部課長）
- 三浦 良雄（株式会社三浦模型）

懷徳堂記念会関係者

江連 久夫（三井住友銀行総務部部長）
坪井 一弘（日本生命保険相互会社本店秘書室長）
俣野 正治（ダイキン工業総務担当部長）
荒田 利男（懷徳堂記念会会員）

学内

宮原 秀夫（総長）
鈴木 直（副学長）
仁科 一彦（副学長）
三成 賢次（法学研究科長）
永谷 裕昭（経済学研究科長）
中村 仁信（附属図書館長）
江口 太郎（総合学術博物館長）
菊野 亨（中之島センター長）
廣橋 利夫（法学研究科・高等司法研究科事務長）
宮下 順一（経済学研究科・国際公共政策研究科事務長）
鳥家 大永（言語文化研究科事務長）
木下 伸二（附属図書館事務部長）
美濃 越進（保健センター事務長事務取扱）
大澤 眞一（基礎工学研究科事務長）
小島 良起（財務部豊中調達センター室長）
木下タロウ（微生物病研究所所長）
橋本日出男（事務局理事）
木村 道夫（事務局監査室長）

池田 嘉夫（事務局安全衛生管理課長）
文学研究科教授会構成員

柏木 隆雄（研究科長）
江川 温（副研究科長）
林 正則（評議員）
飯倉 洋一 泉 万里
奥平 俊六 工藤真由美
平 雅行 玉井 暉
森岡 裕一 湯浅 邦弘
和田 章男

また、当日は複数のマスコミの取材をうけた。現時点で把握している報道は次の通りである。

①式典当日（平成十七年十月十一日）、NHKテレビ午後五時からのニュースの中の地域情報「もつともつと関西」で取り上げられる。受贈式典の模様、模型と設計図、筆者のインタビューの模様などが放映された。

②平成十七年十月十二日、毎日新聞朝刊、「阪大のルーツしのぶ」とのタイトルで写真入りの記事が掲載された。

③平成十七年十月十二日、日本経済新聞夕刊、「よみがえる「懷徳堂」このタイトルで記事が掲載された。

④平成十七年十月十八日、読売新聞夕刊、「懷徳堂」復元模型阪大に寄贈「学びの原点立ち返るきっかけに」とのタイトルで写真入りの記事が掲載された。

披露された「重建懷徳堂」の模型—山田耕司写真



阪大のルーツのふ

重建懷徳堂の復元模型公開
江戸時代に大坂町人が出資して建設され、1945年の大坂大空襲で焼失した「重建懷徳堂」の50分の1復元模型が11日、大阪府豊中市の大

阪大文学部玄閣ロビーで公開された。大正時代の再建時に設計・施工した竹中工務店の制作で、寄贈された阪大は、懷徳堂を文系学部之源流と位置付けており、宮原秀夫学長は「懷徳堂を受け継いで今の阪大があるんだ」と、大阪府豊中市の大

「重建懷徳堂」として、約3万6000点の資料を蔵する。市民を対象に公開された。市民を対象に公開された。市民を対象に公開された。

【日本経済新聞 一〇月二日 夕刊 (大阪版)】

よみがえる「懷徳堂」

江戸時代に大坂商人らが私財を投じてつくった学園が、明治維新で閉鎖となった。財界人らが「懷徳堂」に再興した。懷徳堂の模型が十二日までに完成し、大阪大で公開が始まった。懷徳堂は一七二四年(享保九年)、商人らに倫理や道徳を教えるため、現在大阪府豊中市の玄閣ロビーに設置されている。

阪大文学部で模型公開

て親しまれた。建物は戦争で焼失したが、残った蔵書を大阪大が保管。その中に建物の設計図があることが分かった。当時の設計・施工を手がけた竹中工務店に模型の製作を依頼した。模型は縮尺五十分の一が一基、縮尺百分の一が一基。大阪大文学部(大阪府豊中市)の玄閣ロビーなどで展示中。

「懷徳堂」復元模型 阪大に寄贈 学びの原点 立ち返るきっかけに

問奏曲

大阪大学文学部玄閣ロビーで、江戸時代に大坂の中心部に創設した学園所「懷徳堂」。大正時代に再建されたが、昭和の大坂大空襲で焼失した「重建懷徳堂」の設計図が見つかり、当時設計・施工を手がけた竹中工務店が復元模型を制作し、同大学に寄贈した。

懷徳堂は中井竹山・履軒兄弟ほか、富永仲基、山片蟠桃など優れた学者を輩出し、大阪学術の発展と商道德の育成に貢献した。この歴史に詳しい湯浅邦弘教授によると、中国の古典を中心に高度な講義が行われ、「江戸の昌平坂学園所と並ぶ隆盛を誇った」という。

明治2年(1869年)、新政府樹立による経済的破綻で一時的閉校。しかし、地元の政財界有志が資金を募り、大正5年(1916年)に再建にこぎつけた。

設計図は、幸い焼失を免れた書庫の資料3万6000点の中から見つかった。これを基に計3基の模型が制作

た。懷徳堂は、庶民が気軽に、幅広く学ぶ場だった。身分制社会にあって、「書生の交りは、貴賤貧富を論ぜず、同輩と為すべき事」と定め、商人の子弟も丁稚も共に学んだ。また、困難な事態も民の力を結集して乗り越え、ほとんど官に頼ることなく学園の道を切り開いてきた。

学ぶとはどういうことか。原点に立ち返って考える一つのきっかけとなるかもしれない。(友)



大阪大学文学部の玄閣ロビーに設置された重建懷徳堂の模型

され、50分の1模型を文学部玄閣ロビーに、100分の1模型の2基を総長室と中之島センター玄閣ロビーに置くこととなった。

受贈式で宮原秀夫学長は「大阪は外国に誇れる街だと紹介されているが、大学を訪れる外国人にこの模型を見せ、『大阪は文化を大事にする街だ』と示していきたい」とあいさつ。柏木隆雄・文学研究科長は、「毎日目にすることで、学生に懷徳堂の精神を養ってほしい」と期待を寄せ

重建懷德堂設計圖

それでは、この模型制作のきっかけになった設計図とは、どのようなものであったのか。その点について説明しておこう。

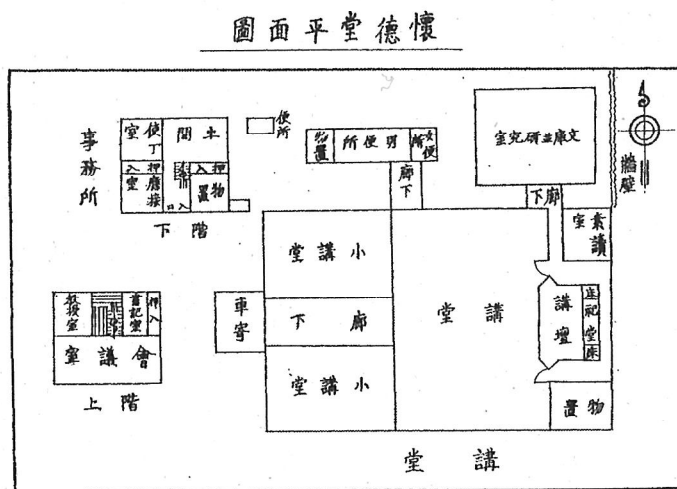
この図面は、大正五年（一九一六）に再建された懷德堂（重建懷德堂）の設計図である。いわゆる青焼きで、主図面は全五枚綴り。縦五一・五cm×横七四・五cm。表紙に「大正四年九月 懷德堂設計図 竹中工務店」とある。

【重建懷德堂設計図】



一枚目は「懷德堂新築図平面図 尺度百分之壹」として講堂および二階建て事務所の平面図、二枚目は「懷德堂新築図建図 尺度百分之壹」として全体の正面図と側面図、三枚目は「懷德堂新築図建図 尺度五拾分之壹」として床伏図・基礎図・屋根固屋伏図、四枚目は「懷德堂新築図建図 各部詳細圖 尺度貳拾分之壹」、五枚目は「懷德堂新築図 玄関詳細圖 縮尺1/20」。

【重建懷德堂平面図】



これによれば、重建懷徳堂は、大阪市東区豊後町十九番地（現・中央区本町橋）の東横堀川に面した公道に西向きに配置され、公道から門を入り、車寄せ、講堂、その左側（北）に別棟の事務所があったことが分かる。

図面の数値は尺貫法で記入されており、講堂床図面の数値「五四・〇（九間）×八五・五（十四間二五）」によれば、縦二十六メートル×横十六・四メートル、床面積四二五㎡（二二六坪）となる。その内、建物の大半分を占める「大講堂」は、玄関・車寄せから廊下を通った奥（東）に配置されており、「五拾八坪五合」、その廊下を挟む二つの「小講堂」はそれぞれ「十七坪五合」と記載されている。大講堂の奥（東）の両側の空間は、この設計図面では、各々「講師溜 八坪」「（内）玄関 土間」となっているが、後にこれらは「素読室」「物置」に改造された。

また別棟の「事務所」は二階建てで床面積は「四間」×「三間半」（十四坪）。一階が「受付」「小使室」など、二階が「会議室」となっている。

懷徳堂文庫には、別に、この内の一枚目・二枚目とほぼ同様の「懷徳堂新築図平面図」もあり、数値はこちらの方が読み取りやすいが、「便所」の位置が若干異なっている。また、大正十五年の「懷徳堂事務所一部改造設計図」、昭和十四年の「懷徳堂表門（塀重門）及び揭示板実測図」、昭和十四年の「懷徳堂表門改造図」なども残されている。重建懷徳堂は、大正五年の建設以後、一部改造・増設を経ているが、これらの設計図でその過程を確認することができる。さらに、昭和二十年の「仮設住居兼事務所設計図」は、大阪空襲による焼失後に設けられた仮設建物の設計図である。

なお、懷徳堂重建前後の様子は次の通りである。大正四年六月、講堂

敷地として府立大阪博物場の西北隅に当たる三六一坪の無償使用の許可を得て、懷徳堂重建の議が決定。十月、地鎮祭執行。大正五年九月、懷徳堂竣工。十月十五日開講式举行、十一月四日、定期学術講演会を開催。十二月、広島高等師範教授松山直蔵を招聘して懷徳堂教授に任命。翌六年一月、会計規則、講義規則を制定、理事西村天因に講師を依頼。一月二十七日、松山教授、『大学』首章を講義、四月、素読科開設、十月十四日、記念祭恒典举行。

その後、大正十五年十月三十一日には、鉄筋コンクリート造り三階建ての書庫・研究室棟が増設されたが、二十年三月十四日、大阪空襲により、書庫を除く講堂・事務所を焼失した。昭和二十年「仮設住居兼事務所設計図」によれば、仮設住居兼事務所は八畳、六畳、四、五畳から成る平屋であり、焼け残った書庫とともに、戦後の焼け野原の中でお事業が継続されていたことが分かる。

重建懷徳堂復元模型の意義

このたびの復元模型制作は、重建懷徳堂講堂が建設されてからちょうど九十年後の出来事となった。九十年前、大阪には市民大学としての懷徳堂を待望する声が沸き上がっていたのである。当時の人々が抱いていた学問に対する熱き思いを、我々は真摯に受け止め、その精神をしっかりと継承していく必要がある。重建懷徳堂の復元模型は、そのための重要な象徴になると思われる。

【関係データ】

重建懷徳堂

地所

大阪市東区豊後町一九番地

(現在の中央区本町橋、大阪商工会議所)

敷地面積

三六一坪

建物

講堂(木造平屋)、事務所(木造二階建)、

書庫・研究室棟(鉄筋コンクリート三階建)

講堂規模

縦二六m×横一六・四m、床面積四二五²m(二二六坪)

設計図面(主図面)

全五枚綴り。各縦五一・五cm×横七四・五cm。

表紙に「大正四年九月 懷徳堂設計図 竹中工務店」

重建懷徳堂復元模型(縮尺 1/50、単位mm)

外観寸法(講堂、門、敷地、外塀を含む) 一二〇〇×九〇〇

アクリルケース寸法 一二三〇×九三〇×四三〇

主材質 硬質紙・モデルボード・プラスチック・木